

# ヒューマニズムとの関連における 民主主義の倫理と教育 (その一)

—教科書研究—

*Morals and Education of Democracy in connection  
with Humanism (part 1) the study of text-book*

by Shingo Kabata

梶 田 信 吾

目 次	頁		
はしがき	1	民主社会と民主主義の倫理	3
序章 「倫理, 社会のねらい」	2	(一) 民主主義とヒューマニズム	4~13

アメリカ軍のヴェトナムからの漸次撤兵, かたやソ連軍のチェコ侵入という資本主義, 社会主義両陣営の対照的な動きに挟まれつつ, わが国では安全保障体制をこれまで通り堅持するか, 段階的解消乃至廃棄せよといった相対立する動きが, 大学生や高校生による既成の体制, 秩序への批判, 攻撃と, 之に対処する大学立法をはじめとする教育再改革への動きを伴って, 結着をつけようとするのが, 最近の趨勢である。

本論稿はかかる情勢の中で敢て問題とするものではないが, しかし全然関係なしとするものでもない。すなわち, かかる状況が, ここに, 戦後の日本の在り方を方向づけ, 憲法はじめ諸法規に規定され, 政治, 社会, 経済, 文化の諸領域において, その復活強化を約束させられ, また努力を誓い, 現在においてもその実現に努めつつある「民主主義の倫理と教育」についてであるからである。而してこのテーマについては, 戦後盛にとりあげられ, 云いふるされたものであり, 論じつくされていることであると, 思われる故, ここに事新しくとりあげる必要はないとも考えられるが, しかし, 事はそれ程簡単ではないと思う。戦後の日本の四半世紀にわたる間には多くの紆余曲折を経, また民主教育については, 国際情勢の変化に応じてのアメリカの占領政策の転換や, 之に対応する自民党政府の文教政策の所謂教育再改革路線により, 数次の学習指導要領の改訂, 教育課程の改定, そして道徳教育の強化, 高校における「倫理・社会」の独立といった一連の施策がみられるのである。その間、民主主義がいかんにか解され, いかなる内容をもって国民を教育せんとするか, は主権在民の民主政治における教育のあり方

と関連して, 所謂「国民の, 国民による, 国民のための教育, すなわち国民教育の立場から, 大いに検討を加え, 研究すべきであると思われるからである。前の紀要で「国民教育論における教育権の考察」において, 国民教育の主張, 立場について概観したのであったが, しかし具体的な教育方法や教育内容については, 多くの同志との共同研究を必要とすることでもあり, 教育運動の中に結実すべきこととして, その成果については未完であった。

しかし乍ら, 今ここに, 民主主義とはなにか, その倫理について, 広範に学説をあげ, かつ深く掘りさげることとは不可能故(しかしこれも現在の如く民主主義の權威を疑い, 間接民主政治への疑問が芽をもたげつつある現在, 民主主義の危機として, 政治, 学会, 教育者あげてとり組むべき秋と思われる。)ここでは, 高校の倫理・社会の教科書にとり上げられている(45年度用)「民主主義の倫理」について採択に出してある全部18社20冊を調べてみた。そして, これを「民主主義の教育」の立場から文部省の教科書検定をへて出ている教科書の中から, 少くともこれだけと思われる箇所を『』に抜萃要約し, 更に〔〕中に敷衍して説明すべきことを記して, 所謂教科書検討を企ててみた次第である。だから, 国民教育の立場からの既成教科書への批判しつつの体系化までには至りえないのが現状である。それには前述の学説の研究や倫社以外の他の教科科目の研究までには手が出ないといった事情も加わっている。また, 筆者の以前から企てている「国民性の考察」も「尊皇思想の伝統」からはまだ手のついてない事もあり, これら国民性か

らみた教育内容の規定も国民教育の立場から早晩なれさねばならないと思っている事を書き加えておかねばならない。せめて高校教育における民主教育の一端を教科書について研究してみた次第である。

### 序章「倫理・社会」のねらい

「倫理・社会」（以下倫社と略称）の教科書は文部省の検定をへて使用されるものである。それは「学習指導要領」が改訂され、昭和39年度から、高等学校第二学年に「倫社」という新しい科目が実施された。そこで、文部省の「高等学校学習指導要領解説・社会編」（以下、「解説」と略称）では、どのように述べているかという「道徳教育は教育活動のすべてを通じて行なうものとして、これをいっそう充実強化するための一助として、社会科の一科目として、『倫理・社会』をおいた」と。（そして今度の教育課程の改定においても単位数は変らないし、この方針は変らないものと思われる。しかし、新しい倫社の内容については未見であるが、恐らく第二編の人生観・世界観については、これ迄の先哲の人生観は、大きく削減されるのではなからうかと思われる、また是非そう願いたい処である。尚その批判は今後発表により起こるものと思われる。）しかし、39年から授業を実施してきた「倫社」が果たして解説にある様になされてきたかどうかについては、必ずしも所期の目的を達しているとは云えないのではなからうか。それ故の改訂といえよう。しかし、これは現実に前向き姿勢で考えての上であって、進学志望の多い高校では、現実を重視するあまり、現制度を無視しての、それ故解説にいう目的を一時放棄しての「倫社」の代わりの受験科目授業や、2単位を1単位にへらしたり、一年間やらずに1～2学期の学習でお茶をにごしているのが、全国的に相当多いのではなからうか。もしかかる措置が一般の傾向であるとするならば、政府のいう民主教育への責任は免がれないし、また現時点での民主教育一般の部分的崩壊は、国民教育の立場からも尚更防衛の責任は大なりといわざるをえず、教職にある者としても国民に対し大いに責任を感じなくてはならないのである。

しかし、かかる事態での反省、責任はただ形式的であったり、非を他に向けるのみのものであってはならないのである。そこに、38年度の「学習指導要領」の改訂に至るまでの文部省当局や政府の客観的にして真摯な反省、検討がなされたかどうか、また、教職専門家の現場からの協力云々が問題になる。それは来年度の文部教研による検討にもかかってくる。今ここに、38年度の「学習指導要領」の改訂についての批判的見解、反対意見の主要な論点であったものをここにあげてみる。

「倫理を政治経済から切りはなして教えることはいけない。ことに、『倫理・社会』を第2学年にもってきて、『政治・経済』を第三学年にもってくるという今回の改訂は、政治経済の具体的な諸問題に関する認識のうえにたって、これをいかにすべきかという実践の問題を考えるのではなく、まず抽象的にある倫理観を与えて、その見地にたって現実の政治経済をとらえることになる。これでは正しい倫理観をつかませることができないばかりでなく、政治経済の理解までが客観的、科学的でなくなるおそれがある。まったく逆立ちしたやり方である。従来のように、社会科『社会』という一つの科目のなかで、政治経済社会の具体的諸問題と密接に関連させながら、倫理を教える方が、はるかによい。というのが、批判者の主要な論点であったように思われる。」と寺沢氏は述べ、更に「これは重要な論点であり、われわれもまた、この論点に賛成である。だが、これは主として形式面からの批判であり、より重要なことは、どのような倫理が教えられようとしているのかという、倫理教育、道徳教育の内容の問題であろう」と述べているが、まさしく然りである。重要な論点というのは、戦後、社会科教育の度々の改変で『一般社会』と『時事問題』の二科目5～10の単位時間が『社会科社会』の一科目となり、3～5の単位時間に縮減したことも見逃してはならないことで、新教育の花形であった社会科、その中で代表的な、現代に関する問題について思考し、解決を考え、努力すべき学科『一般社会』と『時事問題』の学習が内容の基本的なものに精選し、問題学習より知識注入型にかえて、ゆっくり考え、試行錯誤しつつ、目標に達させようとする経験学習 Learning by doing の方式をやめたと思われる点である。それは25年を境とする愛国心を強調する道徳教育の主張に平行しての、個人の義務、責任を強調する個人科的な社会科へと進める関連措置であったといえよう。それは更に38年度からの道徳教育の充実強化のために、『社会科社会』の『政治・経済』と『倫理・社会』の二分となって、前述の如く、政治経済社会の具体的な諸問題は週2時間の学習に縮められ、しかも第三学年履習と引きはなされては順序が逆になり、密接な関連どころではなくなったのである。

このことは、今後の改訂によって大いに改めらるべきことと思うが、新聞の発表によるとあまり期待出来ないといえるし、それ故、問題になることと思うのである。

しかし、現行のま、猶三年は続けられる倫社の教育内容は、所謂「学習指導要領」に基いて規定されるのであ

\*1 寺沢恒信、高校倫理社会の教科書批判、明治図書P7

るから、それから生ずるところの問題、限界を考えてみることにする。

『学習指導要領』は、「倫理・社会」という科目の教科内容を規定して、(1)人間性の理解(2)人生観・世界観(3)現代社会と人間関係とし、これら三つの主要題目のもとに取り扱われるべきいくつかの小題目を規定している。

「民主主義の倫理」とか「民主社会と民主主義の倫理」は、教科書の大半が、(3)現代社会と人間関係のもとに扱っているが、猶半数近くは、別にして最後に扱っている。そこに編著者による民主主義についての見解の違いが窺われるといえよう。

『解説』にこの科目の目標をのべてあるが、今「民主主義の倫理」に関連する目標をあげると

「(1)人間尊重の精神に基づいて、人間や社会のあり方について思索させ自主的な人格の確立を目ざし、民主的で平和的な国家や社会の形成者としての資質を養う。」

「(4)現代社会について科学的、合理的に理解させるとともに、そこにおける人間関係のあり方について考えさせ、人間や社会や文化の問題について、これを建設的に解決していこうとする態度とそれに必要な能力を養う。」が、あげられる。

民主主義についての、指導要領で示す内容は、次の通りである。

- ・民主社会と民主主義の倫理
- ・民主社会をささえている精神（たとえば、人格の尊厳と個性の尊重、自由と平等、社会的連帯性、公共の福祉など）を理解させるとともに、倫理と政治や経済との密接な関連にもふれる。）

そこで、はじめにのべた様に、各教科書の中から、これだけは述ぶべきだと思う箇所をのべてみようと思う。そして、目標に留意しつつ敷衍して説明すべきことを書き加えてみようと思う。

### 民主社会と民主主義の倫理

これが、「倫理・社会」の全コースを結ぶ最後のテーマである。尚、個々の教科書のテーマは上記に統一されているのではなく「民主主義の倫理」としているのもあるが、しかし、第三編の「現代社会と人間関係」の終りの章であったり、別の章として終りにこのテーマを持って来ている意味から、第二編の倫理的な考察と第三編のまとめとしては矢張り、「民主社会と民主主義の倫理」か、或は自由書房の如く「民主的社会とその倫理」の方が適切であると思う。

「学習指導要領」によると「民主社会をささえている精神（たとえば人格の尊厳、自由と平等、社会的連帯性、公共の福祉など）を理解させるとともに、倫理と政

治や経済との密接な関連にもふれる。」となっており、そこで一年間の学習で取り扱ってきたことの上めくりと、次の学年での「政治・経済」への橋渡しをしようとするのである。

ところでこの指導要領の意図に基いて、教科書の編集はなされているであろうが、「まえがき」（はしがき）に学習のはじめに当たっての心構えや、本書のねらいをのべてある中に、この「政治・経済」の橋渡しをするものであるということについては、殆んど触れてないのはどうしてであろうか。触れるとしても、はっきりとはなく、倫理の内容からの関連として「政治的、経済的な問題、といった、政治経済の字句を見出すのが大阪教育図書のみであるということとは意外であった。すなわち、「IV……倫理の問題は、われわれが社会のうちに生き、社会をよくしようとするに当たって、根本的な問題である。すべての政治的・経済的な問題もその根源においては、倫理の問題に連なっていると言えるであろう。

したがってわれわれのひとりひとりが、「倫理・社会」の学習を通じて……」とあった。

そして、同書では、終章の民主主義と倫理の最後の節として、2、倫理と政治・経済の小テーマで関連づけを三頁半にわたって記述している。その内容については後でふれることにする。この「倫理と政治・経済」のテーマを扱っているのが、他に一社あった。それは三省堂（三訂版）である。外の18冊は目次から察して全然見当らないといえそうである。

この点、「倫社」の内容とこれを記述する担当者の共同のしかたや、あるいは中学時学習の社会科や第三学年で学習する「政経」「日本史」との連けい如何を想わせる点ではなかろうか。実際授業をする教師にとって、「倫社」の三領域「人間性の理解」「人生観・世界観」「現代社会と人間関係」を心理的のみでなく内容上円滑に移行させるには、どこか木に竹をつぐというか、異和感をいなくというのが、未熟な筆者の体験であり、内容構成に問題があるのではなかろうかと思っている。すなわち「一般社会」的な「現代社会と人間関係」を「人生観・世界観」の倫理的科目に、それに心理学的なものを加えて「倫理・社会」という科目にして「政経」は2単位に縮められたという措置、また第三学年との関連から「現代社会と人間関係」を最後にまわしていることから、授業も後で扱うのは自然であろう。

しかし、かかる構成も、学習指導上から人間性の理解から現代社会の考察、その上で人生観・世界観と扱ったらいのではないかと考え、文部教研でも発表した次第であるが、かかる構成をとっているのは、わずかに二社実教出版（城塚登編）と三省堂（改訂版）のみである。

はじめの「倫社」という科目への代表的批判にあった様な逆立ち的現象を既存の制度内で出来るだけは正し自主編成をして行くなれば、せめてこういった構成になるであろうと思われる。

さて終章の「民主社会と民主主義の倫理」の本文についてであるが、このテーマはもちろん当然そうならねばならないものであるとしても、それが問題なしに当然そうあるべきものとして、人格の尊厳、個性の尊重、人間性の尊重という風に展開させていくのはどうであろうか。やはり、われわれが現代に生きるには民主主義の倫理によらざるをえないことの記述をどのようにするかは大切である。ここにいう民主主義ということばを、われわれは聞き慣れて久しいことばであるだけに、かえてその真意が表面的、外面的、また部分的にとらえられているうらみがあると思われるからである。このことは、故意にではなく、所謂日本人の悪い癖、国民性に由来すると思われる。真剣に論理的に考えることを不得手とする故か、考えようとしなない、軽い投げやりの態度、心性に一因があると言えようが、それに加えて、民主主義が敗戦の憂目にあって示され与えられ、信奉を慫慂、強制せられたという他律性の故に、これまた国民性ともいえる「事実だから致し方がない、現実に弱い、更に権力に対して弱い」長い者には巻かれる式の態度、心性の故に、真に民主主義の精神なり倫理が理解徹底したとは言いきれないと思うからである。

これを裏書きするかのように、日本は平和条約を結び、米軍占領軍の撤退以後の政界の、公職追放組のカム・バックによる再編成、占領政策下の措置の修正撤廃の中での国会運営の芳しからぬあり様は、与党野党間に繰りひろげられ、国会の正常化はなかなかには確立されぬ状態であり、中央政界の動きは地方、社会の随処に、民主主義のルールに則るといいつつ民主主義の名、形式における非民主的、反民主的な私利私欲優先の競争社会が見出されるのであり、断絶、不信、享楽、マイ・ホーム主義、棄権といった、われわれの手による、われわれ国家再建の努力は不可能かと断念、嘲笑されるかの如き民主主義の危機が訪れつつあると痛感されるのである。

産軍学共同の帝国主義大学解体を叫ぶ大学紛争や受験教育一辺倒反対の高校紛争は、われわれ教師の民主教育如何を問いかけ、反省を促がすとともに、その努力の足らざるを悔い、またある面においては、学生と共に師弟同行、民主日本の道を進む意を強うすべきであると思うのである。かかる問いかけの状況下での倫理、民主主義をいかに考えるべきか。通り一片の抽象的な美辞麗句による心情の説明だけでは、生徒に訴え、動かすことは不可能だと思われるし、教師自身心中忸怩たるものがある

うと思われる。かかる状況や気持から、現行の教科書をみていくと、7～8社は一般と異なった工夫をしているといえる。

### (一) 民主主義とヒューマニズム

三省堂改訂版では、全体を五篇に分け、終りの篇は民主主義の確立として、はじめに次の様に記してある。<sup>\*1</sup>

『われわれは、現代社会の問題点や人生の諸問題をいろいろな角度から考えてきた。これは、「現代社会をどう生きるか」という問題を考える手がかりを探るためであった。……われわれは、ひとしく日本人として生きている。したがって、そこにはまた日本人として共通の課題がおのずからうかびあがってくる。それは、われわれが民主主義をよりよく発展させつつ、日本民族の当面する課題にとりくみ、それを通して日本民族として、人類の幸福になんらかの貢献をなすということにはかならない。われわれの生き方も、直接間接にこの課題の解決につながっている。ここでは、これまでの学習をふりかえりながら、この問題を考えてみよう。』として、以下わずか5頁を 1.現代に生きる基本的態度(人間の尊さ、有限な人間) 2.国家と国際社会(国家、国民生活、民族、ナショナリズム、国際社会、愛国心と人類愛)で全頁177を終っているのはVのはしがきの文に比し内容は短かきに失しているといえる。ただ、そのはしがきは終章のはじめとして記述に最適と思ひ、ここに記した次第である。

「民主社会と民主主義の倫理」のテーマの記述の部分は倫社の終章をなすのであるが、18社20冊の本文頁数と終章頁数の比率をみると、平均6%であり、教科書により一頁の字数の違いもあろうが、本文の最も多いのは講談社230頁、山川、日本書院の順で、終章に多くをあててあるのは中教24頁、日本書院19頁、講談社16頁、東書15頁となり、比率からみて、中教11%、東書10%、日本書院9%の3冊の外は6～8%が8冊、3～5%が9冊となって居る。東書(東京書籍)の如きは本文166頁に対し15頁で10%と、中教の頁数多く比率が高い11%と共に、最も重点を置いていると言えると思う。さて、全体における終章の部分の割当は上記の如くであるが、その構成からみる時は、それぞれ一長一短があるものの、おおむね学習指導要領にしたがって、人格の尊厳、個性の重要、自由と平等、社会的連帯性、公共の福祉などについて各項目別に述べている。その述べ方については、後でとりあげるけれども、さまざまであり、そ

\*1 P172

れだけで大体よいとはいえないようである。

ただ、これまでのまとめとしての「民主主義の倫理」である故に、民主憲法で示される民主主義を説明するだけでなく、やはり何故、民主主義でなければならぬのか、特に日本人であるわれわれにとって問題はないのか、民主主義的傾向の復活、強化を受け入れざるをえなかった歴史的社会的事情から入り、いかにわれわれのものにしてきたか、またその障害点はないかどうかを考えさせ、民主主義に生きる決意を強めさせる内容の教育であらせたいと思うのである。今のべた歴史的、社会的経過、事情については、それは高校三年の政経や日本史で扱うからといって、ほとんど触れることがなければ、文部省が「学習指導要領解説」で示す「先哲の思索のあとをたずね、これを現代社会の中に生きる自己の問題と結びつけて広く考えさせる能力と態度を養う」ことにはならないだろうし、また「(4)現代社会について科学的合理的に理解させ……人間や社会や文化の問題について、これを建設的に解決していこうとする態度とそれに必要な能力を養う」にはなりえないのではなからうか。尚「政経」での「日本国憲法制定の経過」に関して、敗戦によるポツダム宣言受諾から、新憲法制定にいたるまでの経緯については、ほとんどの教科書は故意にか簡単にふれ、ポツダム宣言受諾、占領政策の推進に伴って憲法改正についてマ司令部よりの指示(示唆、命令)、またはG・H・Qの草案に基づいて新憲法草案制定、国会審議、新憲法成立<sup>1</sup>という風に簡潔に扱われ、民主革命、民主主義の確立への足どりについては詳しくは示されていないのが現状で、日本国憲法はその大部分が外国人によりつくられたものである、としても、しかし、議会で約半年にわたり慎重審議した<sup>2</sup>民主憲法、であると記述しているのは、小生が調べた16冊の政経の教科書では、わずかにミネルヴァ書房のみであった。だから三年になっても教科書からは真の事情は分りえないのであり、教師の努力による「学習指導要領」の準拠が大いに必要となるのである。その点「政経」においては尚更記述不十分と思われるのが多いのではなからうかと思う次第である。

さて、かかる理由から民主主義が生まるべくして生まれたことを記述している教科書を探してみた。そして「講談社版」によって要求がみたされると思われるので、次にそれを引用して、ここに「民主主義とヒューマニズム」の項目をあげ、是非説明を必要と思う。<sup>\*1</sup>

『民主主義はもともと政治の形態を示すことばであった。しかし民主主義は同時に人間のあり方の理想を示すものである。したがって、民主主義は単なる政治概念から、人間のあり方を示す文化概念となり、同時に倫理的な理想を示す概念となっている。かかる意味でのデモク

ラシーの内容は何であろうか。

民主主義の根底にはヒューマニズムの理念がひそんでいる。ヒューマニズムという理念はデモクラシーより広い意味をもっているが、デモクラシーに関係する面から次の三つの性格を取り上げることができる。

ヒューマニズムの第一の特色は人間尊重ということである。それは単に人間のもつ人格性の尊重にとどまらず、肉体と精神を含めた、全体としての人間の生命の尊重と考えられてよいであろう。

第二の特色は、人間の現実生活の肯定ということである。キリスト教には原罪の思想があった。この考え方からすると、欲望や本能から成っている現実の人間生活はつねに罪によって汚されているといわざるをえない。

しかし、人間の生命が欲望や本能をも含めて、全体として尊重さるべきだということになれば、人間の生活は全体として肯定されることになる。

ヒューマニズムの運動は歴史的にはルネッサンスとともに始まるといわれている。それはルネッサンスの中に、中世の否定的な人間観に対して、このような現実生活の肯定の意味があったからである。ヒューマニズムの立場では、人間の欲望を自然のままの欲望だという理由で拒否することはない。

ヒューマニズムの第三の特色は、教養を身につけるということである。ヒューマニズムは人間の生命尊重であり、現実の生活の肯定であるが、しかしそれと同時に、人類の生んだ文化を尊重する立場である。

民主主義の倫理 デモクラシーの根底にはヒューマニズムがあるが、そのことから、デモクラシーの倫理の三つの特色を理解させる。』(講談社P220)

【ヒューマニズムの三つの特色をあげ、それから、デモクラシーの三つの特色を理解させるのは至当であるけれども、いきなり、デモクラシーの根底にはヒューマニズムがある、と重要なつながりをボンと出すだけでよいであろうかと思うのである。】この本の先の部分にヒューマニズムについて述べているところであろうと思って索引をみると、218～221頁とあり、それは今とりあげている終章に値する部分、第2節民主主義の倫理「民主主義とヒューマニズム」である。それで意外に思って本文中のヒューマニズムの字句を探してみたら「ルネッサンス」の項にヒューマニスト・ペトラルカ(P93)とあり、「ただ自然の美しさをたたえるために山に登る……自然の美しさへの肯定がある、とあり、他に「カントのヒューマニズム」(P108～P110)で、「どんな人でも、人間として

\*1 講談社倫社教科書第三章P215～

恥ずかしくない人間、りっぱな人間になれる。人間はだれでも人間として尊い。だからカントは、人間を尊敬することを学ぶといったので、このような、人間を尊重する態度がヒューマニズムなのである”との記述がある。もう一箇所は、「マルクス以前の社会主義」の項の中、オーエンのヒューマニズムは若い人々を熱狂させた。(P122)とあり、社会的善悪の根本的原因を私有財産制度にあるとしたオーエンを、ヒューマニストと記してあるだけである。

だから本書については、民主主義の根底にあるとするヒューマニズムについては、前のところではまとめてはないのであるから、ペトルカとカントのみでは折角の説明も前半が不十分であり、「ヒューマニズムの発展」については、当然項を新につくって説明すべきことであろうと思われる。

そこで、先のデモクラシーの根底としてのヒューマニズムについて、他の教科書で扱っているのはないか当たってみた。『教育図書』では、第三編第三章現代の倫理第1節民主主義の問題点、民主主義とは何か、の小節中、『民主主義とはヒューマニズムの一形態である。(と述べ、そのヒューマニズムについては、すぐその前に)『民主主義は多種多様に受け取られているけれども、そのすべての場合に共通の語感が、このことばのなかにひそんでいるのである。それは、つまり人間が身分や地位や貧富にかかわらず、みな平等であるという考え方である。しかし、平等といっても、年齢・性・能力などの点で、人間はおのおの違っていることは否定できないのであるから、この場合の平等とは、人格としての平等ということであって、人格の尊厳に対する要請が、この思想の根本である。(そして、それは更に)生命に対する畏敬の念があってこそ、ひとりひとりの人格が、かけがえない、尊厳なものとして感じられるのであるから、これは、いわばヒューマニズムの精神である。』と説いており、「民主主義とはヒューマニズムの形態」であるとしているのであるが、ここに、民主主義とヒューマニズムの関連づけがなされているといえる。そしてヒューマニズムの一形態とするように、ヒューマニズムの歴史的発展において、それが政治的から社会的、文化的な意味における民主化となって発展してゆくのであって、民主主義の発展の歴史の底には、人間誰でも同じ人間であり、ひとしく人間として、自由に平等に、人格をもつものとしても認めてもらい扱って貰いたいという要求が、権力の圧制により目ばえ、自覚され、旺盛になってゆくのであり、この人間としての目ざめ、人間性、個性、個人の尊重の主張は、西洋においてより早く、封建社会の崩壊とともに、市民社会の成立につれ、所謂ルネサンス

運動の中に生じて来たといえるのであり、そこに、ギリシア、ローマ文化の復興、古典愛好者をフマニストと呼ぶことから、その生活態度、主張、精神を尚しとする人々をヒューマニストと呼ばれ、それらが政治的に民主主義の主張を市民階級の中に呼びおこして行ったのであるから、民主主義の根底にはヒューマニズムがあるといえるのである。

ただ、この教科書 \*3 においても惜しいことには、かく民主主義との関連で出てきたヒューマニズムという字句は、歴史的に発展の系列に出すべきであろう、その上において、世界史で学習したことを整理してまとめ、民主主義を説いたらと思うのであるが、それが見当らず、II. 人生観・世界観の中で第1章西洋の考え方、第3節世界の思想、1. ヒューマニズムの小節で、ルネサンス、宗教改革にふれる中に『ドイツでは学者の間に新しい理性的な倫理や徳や宗教観があらわれた。このいずれもがヒューマニズム(人文主義)の運動である。

(欄外 Humanism 人本主義・人間主義なども訳す)……ルター、カルヴィンの宗教思想のなかに人間理性の比重が大きくなってきた……信仰とはいっても、内面化と自律がとくに強調され、善や真の源は自我に求められるという思想傾向である。人間性の尊厳と自我の自覚を通し、他の権威によるのではなく、自律的に安心立命の道を探ろうという倫理的な態度である。前に述べたヒューマニズムとは、これらの傾向をも含むものといえる』とあるだけで、第4章現代の考え方にも、その終りに一

「個々の日本人の主体性の確立ということが、とくに現代ヒューマニズムの要請するところである」と結ぶだけである。それから民主主義との関連でのヒューマニズムとすぐ出るのであるから、その関連づけは大いに結構であるけれども、全体の構成上からは、民主主義の確立のためのヒューマニズムの発展が説かれていないので理解されにくいことで、残念に思うのである。

かく終章としての「民主主義の倫理」を重要視する故に、その理解のために「ヒューマニズム」との関連づけを、教科書の中を探し、それを引用し、その足らざるところに不満をのべているのであるが、この「ヒューマニズムとの関連」について記述しているのも、調査したところ極めて少く、前にのべた「講談社」「教育図書」の外は、次の「自由書房」「中教出版」「大阪教育図書」の三冊にしか過ぎないようである。それで、次に、「大教」の索引でヒューマニズムをみると、

『孔子の仁の道は、近代世界のヒューマニズムの根本精

\*3 教育図書

神と相通じるものがあるとも言える。」\*4

「心学運動の特徴と見られる点は、第一には、士農工商の階級にかかわらず、人間はすべて平等の心性を有している、というヒューマニズムの上に立っており」\*5

「宣長の儒教攻撃は……孔子はむしろ、欠点も持ち合わせている、人間らしい人間と考えている。この点から見ると、宣長の人間観の根底には一種のヒューマニズムが存していると言いうのであろう。」\*6

「マルクス主義が、もともと、貧困な人々、抑圧されている人々を解放しようとするヒューマニズムの精神の上に立っていることは言うまでもない。」とのべ、終章の「民主主義と倫理」の中の「民主主義とヒューマニズム」の小節の中で「われわれは以上の叙述を通じて……ひとりひとりの人間に対して愛情を持つということが、われわれの倫理の根本原理ではなからうか……この人間愛、ヒューマニズムの精神を基礎にしなければ、けっして理想的なものとなることはできないと思われる。……ヒューマニズムの精神こそ、民主主義の基礎であると言えることができるであろう。」\*7

とし、政治がこのヒューマニズムの精神を忘れないならば、そこから、話し合いの精神、個人の自由の尊重、公共の福祉を尊重するという考え方が導かれてくる、と展開し、民主主義の精神の説明を終っている。

この「大教」の教科書の構成はもっとも適切なものと思うのであるけれども、孔子や心学、宣長の中にヒューマニズムの精神を見るのはよいとして、西洋の人生観の中で、ルネサンスやカント等にそれを見ず、マルクスを出すあたり、人間愛のみを強調するためかとも思われるが、それらヒューマニストについては、第2編で扱ったことであるから、第3編の終章、民主主義の倫理の根底にヒューマニズムがあるとのべてあるところを説明する際に、もう一度索引により前を見させることで思い出させ、連関をつけるということが必要であろうと思う。しかし欲をいえば、ヒューマニズムの発展を一箇所にまとめて扱った上で、民主主義の精神、倫理を扱い、それも前述の三つの考え方に導くというだけでなく、もう少し他の教科書の様に、民主主義の基本概念について紙数を持つべきではなからうかと思うのである。

次に、同じく民主主義とヒューマニズムを結びつけて意図的に説明してある『自由書房』のを、ここにとりあげることにする。『民主主義は、人間の尊厳を基本的な立場とする。人間の尊厳ということは、他のことに関して補足的に語られるようなものではなく、それ自身で無条件に受け入れられなければならない、民主主義の根本信条なのである。それは、今まであるいはヒューマニズムと呼び、あるいは人類愛と呼んできたものとほぼ同じ

であるといってもよい。われわれはここで人間の尊厳ということをも、もう少し内容的に考えてみよう』として、それから「人格の自由と平等」「個性の尊重と民主社会」「社会の連帯性と公共の福祉」と民主主義の基礎概念を記述してむすんでいる。ここでは、前出のヒューマニズム（内容は、これから紹介することになっている）と呼び、あるいは人類愛と（まで発展して）呼んでいるものが、結局は人間の尊厳に目覚めての動きであり、それがまた民主主義の根本信条となり、民主政治を発達させたものである、という風に説明を加え、また、ヒューマニズムの精神を既述の中から索引により引き出し、反復、強調すべきことであろう。そこで

次に、ヒューマニズムとして引用できるのをあげてみよう。ここで不審に思われるのは『ギリシア思想が西洋文化に与えた大きな影響は、ルネサンスにおいて示された人間性の尊重である。』\*8

と記されているにもかかわらず、近代ヨーロッパの思想の章では「ルネサンスの精神」の1小節もわずか10行で扱い、すなわち、『…ルネサンスと宗教改革との二つの運動に共通している点は、中世的教会とその神学の権威から人間を解放することであった。そしてルネサンスは、現世肯定の思想に立って、全き人間として生きる教養を求める運動であった……』として、【ヒューマニズムの動きではなかったのであろうか、記されていない。】そして、近代を飛びこえて「現代の思想」「20世紀の社会主義思想」になって、突如、『空想的社会主義者として片づけられたオーエンや、サンシモン、フーリエなども、それぞれヒューマニズムの立場から社会主義を考えた。\*9（さらに）今日の社会主義は、マルクスやレーニンとは違った方向をとって、もっとヒューマニズムの立場、分配の公正とか人間の自由と平等という倫理的な正義観の立場からとらえていこうとしている。\*10と述べ、

次に、サルトルの「実存主義はヒューマニズムである」について「自己の行動に対する責任は、同時にすべての人類に対しての責任ともなる。そういう状況の中で自由を目ざして生きることが人間の本来性である。この

\*4 大阪教育図書P96

\*5 P120

\*6 P123

\*7 P218

\*8 P35

\*9 P95

\*10 P97

ようにして人間の本来性を生かすという意味からサルトルは、実存主義とはヒューマニズムであると規定した、と述べている。

之につづいて、20世紀のヒューマニストとして、ロマン・ローラン、「イエスをひとりの人間としてとらえ、その激しい人間愛が、歴史の変化の底を貫いて、今日にまで流れていると信じた、宗教的ヒューマニスト・シユバイツァー、アジア人のひとりとして、インドの伝統である平和の思想を体現したガンジーの名があげられる」\*11と記している。ヒューマニズムを索引により引用すると、そこまでが該当するヒューマニストであったが、それらの人々につながる共通の精神として、この本では「ヒューマニズムとは人類愛である」\*12と「20世紀の人類愛」の項でのべ、ここにヒューマニズムの発展について概略するのであるが、ヒューマニズムとして別にまとめて記述してはなけれども、それは次の民主主義の精神との関連づけをなすものと解されうるので、これまでの単なるヒューマニズムの紹介的記述とは別の意味で、独立した記述とすべきであると思うのでここにそれを引用してみよう。

『人類愛とは、一般的にいえば、人間を人間として愛するということである。(それは)人々の属する社会それぞれの差別を越えて、それらを全人類的なものへと発展させていこうとする性格をもっている。その点で人類愛は、ヒューマニズムとして解することもできる。

そして、このような解釈に従うならば、われわれがさきに「人生観・世界観」でみてきた、おもな先哲の思想は、大なり小なり人類愛の精神と基本的につながったものとして、もう一度読み直してみる必要もあろう。すなわち、人類愛の精神は、それなりに一つの思想的な歴史をもっているのである。ことにキリストの説いた神の愛や、釈尊の願った衆生済度という人間平等観などは、人類愛の精神を中軸として成立したものであることを示している。また、われわれが「世界史」で学習する(終ったであろう)ルネサンスや宗教改革や、近代の市民社会の成立の底には、いわゆるヒューマニズムの精神が支配していたことは明らかである。カントの人格的自由を根幹とした道徳も、ベンサムやミルの功利主義の考え方も、それぞれの時代的と社会的背景は異なっているにしても、同じくヒューマニズムの上に立って出てきた思想なのである。』\*13

と述べているのである。そこで思うのであるが、民主主義の根底に流れるヒューマニズムなるが故に、その理解は大切であり、その記述が断片的に索引でつないでみたり、また上述の如く1~2頁で一過させずに、「三省堂改訂版」のように、ヒューマニズムの項を民主主義の

項の前に大段的に取扱って貰えないだろうかということである。そして、そのためには、構成上、先哲の人生観・世界観を通史的に平板にでなく、思いきって整理して縮めてもいいのではなからうか。倫理学史や哲学史であっては生徒には難解すぎるし、教師にとっても困るのである。この辺48年度からの教科書で問題となるであろうし、大いに考慮して頂きたいことなのである。

20世紀の人類愛は(当然)ヒューマニズムとして解することができる。し、それ故、民主主義との関連も考えねばならないのであると思うのであるが、この「人類愛」を扱っている、Ⅲ. 現代社会と人間関係 第3社会集団における人間関係、の中の4. 国家と国際社会、において、国民社会・国家・民族・愛国心とナショナリズム、国家的・民族的偏見、人類愛とは何か、20世紀の人類愛の諸小節の中に「民主主義」「国際的民主主義」の字句が見出されないのはどうしてであろうか。民主主義という言葉はタブーではなからうが、それを論ずると検定にパスしないという訳ではなさそうである。それでは不充分だと思ふ。

さて、次に、民主主義をヒューマニズムと関連させて扱っている数少ない教科書の最後のものとして、正義と民主主義の項目で扱っている、\*14「中教出版」の教科書をとり上げることにする。

『基本的人権を保障し、個人の自由と幸福との実現を目ざす民主社会において、倫理の中心をなすものは正義にはかならない。

しかし正義は、各人のもっている権利を守るけれども個々の生きた人間を見ない。また見てはならない。正義は公平にはかり、きびしくさばく。この意味で、正義はいわば盲目である。そこで、この正義を補って、生きた人間に権利以上のものを許し与えるのは愛である。なぜならば、愛は、自分と他人との連帯性を自覚して、自他の一体性をうちたて、……人間性はもっとも美しく開花するのである。

このように、正義は人間相互のあいだに平等を実現し、愛は人間相互を一体に結びつける。そして、この正義と愛とを貫くものは、人間性の尊厳に対する畏敬であり、ヒューマニズムの精神である。』

と説明する。以上で「民主主義とヒューマニズム」との関連づけを扱っているものについて、要約し引用した

\*11 P 110~112

\*12 P 159

\*13 P 159~160

\*14 P 202



のであるが、最後の本『中教』に出てくる「ヒューマニズム」を先哲の人生観・世界観において扱っている中から引き出してみると次の通りである。

「ルネサンスとヒューマニズム」\*15 「人間性の尊重、人間が世界の中心であり、自然を支配する主人であるという自覚、と記されてから「現代の思想」に至り、いきなりルネサンスに生まれ、啓蒙運動によって完成した近代ヒューマニズムは、人間を神から解放し、個人の自由と理性の力を説いて、人間社会の無限の進歩を約束した。そして、この精神に結びついて、近代を特色づける市民社会や科学技術が登場した。市民社会は個人の自由と平等とを旗じるしにして、政治的には民主主義を、経済的には資本主義を重視し、科学技術は産業革命を通して生産力を飛躍的に増大させ、豊かで合理的な生活をもたらした。\*16 と述べ、ヒューマニズムの言葉は、ルネサンスにのみ出て、後になって近代ヒューマニズムと出、社会主義においてそれが述べられ、次には現代のヒューマニズムとしてロマン・ローラン、ガンジー、シュバイツァーが出てくるのである。かく述べるところの発展自体については、間違いではないけれども、しかしヒューマニズム発展の史的跡づけの点からみると「世界史」との関連の上とは言えこれだけでは理解不十分と思われるし、ましてや、民主主義との関連を考えようとすると、尚更である。構成の上からみて、意外であったと不満を言わざるをえない。

しかしながら、それでも多くの倫社の教科書の中で「ヒューマニズム」について節を別にして記述してあるのは各社皆のべている「現代のヒューマニズム」を別として、二社あった。ひとつは『好学社』であり、「西洋のヒューマニズムの課題」の一節で「ヨーロッパのヒューマニズムは、ギリシア的ヒューマニズムと、キリスト教的ヒューマニズムという二つの異質的なものの出会いと、統一の上に形成されていることに気づく。\*17 という如く、西洋近代までの西洋的思考の伝統を、ヒューマニズムの立場と関連させて、すなわち『知と信の両立と統一』という課題そのものは、西洋ヒューマニズムの底を共通して流れているといえる。いや、東洋、さらに今日のわれわれの身辺を振り返ってみても、この両者をいかに自己のなかに統一していくかということが、われわれの人間形成、思想形成のうえでの大きな課題ではないであろうか」\*18 との記述は、西洋思想史上の基調を説いたものであり、また、後の「20世紀のヒューマニズム」\*19 とつらなると、終節の「民主社会の倫理」において結ばるべきであると思うのであるが、最後の節で民主主義は説かれているものの、ヒューマニズムの一字句すら見出されないのは、まことに残念といわざるをえないの

である。

「ヒューマニズム」について、一節12頁にわたって（ただし、それには「現代のヒューマニズム」を含めて、）そして、最後の章節「民主主義の確立」の前において、構成上連関を考えておるのは、残りの一社『三省堂改訂版』である。その点、指導要領に準拠するならば尚更、「民主主義とヒューマニズム」の社会的基盤と思想的構造の上からみて「先哲の人生観」においてふれるとしても、猶ここで、も一度、くわしく説明する構成こそ、もっとも望ましいと思うのである。他の19種の教科書は、その点、教師による『ヒューマニズムの歴史的展開』についての説明を、「民主主義の倫理」の前か、平行して扱うべきであろうが、理解しにくいのではないかと思うのである。

しかしながら、次の「民主主義の確立」へのつながり方、また、終章節のまえがき\*20 は前述の如くよいとして、「民主主義の確立」の終章節がわずか5頁で、1. 現代に生きる基本的態度 で、人間の尊さ、有限な人間の小節1頁半扱うのみで、次は 2. 国家と国際社会で国家・国民生活・民族・ナショナリズム・国際社会・平和への努力・愛国心と人類愛と3頁でかたづけてしまっている。そして全頁177頁では、末尾に、思想家とすることばで30頁あてたからでもあろうが、最後のまとめとしては、極めてお粗末といわざるをえず、折角の「ヒューマニズム」の節を設けたにもかかわらず、しまりがきかないと思えるのである。それでも「ヒューマニズム」として、ユニークにまとめている。その記述はいかがであろうか、次にみてみよう。

#### 『1. ヒューマニズムの歴史的展開

〔ヒューマニズム〕人間に最高の価値をおきいっさいを人間中心に考える立場に立って、真に人間らしい人間を求め努力や運動や思想を広くヒューマニズムという。

〔ヒューマニズムは元来一つの体系であるよりも一つの生感情であり、一つの心的態度である。それは体系としてよりも、むしろその根源的な発現において重要である。それは根源的な生感情として、人間価値の自覚として、人間性を抑圧するもの、歪曲するものに対して、人間性の解放を要求するものであり、かような解放の思想

\*15 中教 P 52

\*16 P 136

\*17 好学社本 P 62

\*18 " 63

\*19 " 145

\*20 P 172

として、従ってまた反抗の思想として重要である。と、三木清は「ヒューマンイズムの倫理思想」(岩波講座倫理学第15巻P14)でのべているが、それは、教科書の記述の部分を 根源的な抑圧への反撥の生感情として言いかえたものと言えよう。

また、これまでの各教科書でも『高教出版』では『最も広い意味でいうと、人間の「人間性」を尊重し、それを抑圧するものからの解放を目ざす思想』\*21 『東京学習出版』では、『一般に人間性の解放を目ざす思想である。……現代社会における人間性の危機を自覚したヒューマンイズムの運動』\*22 『日本書院本』では『ヒューマンイズムは人間尊重の思想である。……失われた自己の人間性を回復する運動こそ、人間革命であり、その立場を「現実的ヒューマンイズム」「解放のヒューマンイズム」\*23 人間の人格的完成に最高の価値をおくヒューマンイズム』\*24 であり、『角川』では『ヒューマンイズムとは、人間性(ヒューマニティ)をなによりも尊ぶ考え方、…人間がなによりもまず第一に人間自身であろうとする主張の見られるところ、そこには共通してヒューマンイズムの立場があり、ヒューマンイズムは古くて、同時にまた新しい思想』\*25 である、と幾分表現は異なっているけれども、三省堂版がもっともよく意をつくしていると言えよう。]

それならば、「ヒューマンイズムの歴史的展開」の記述は、如何というに、まず、『ルネサンスにおける万能の天才(普通人)つまり人文的教養を身につけ、強い個性をもった、たくましい万能の天才となることが、この時期では人間らしい生き方と考えられた。』\*26 次には、18世紀の啓蒙思想の時代における『人間らしい生き方』は人間の知性と経験にもとづいて「合理的」に考え、合理的でないものはすべて善くないものと、悪い面はとりのぞくことが出来、不合理な社会制度は改め、人間の基本的人権にもとづく自由・平等な社会をつくろうとする態度や運動にみられる合理的・啓蒙的な生き方』\*27 となり、ここにヒューマンイズムはブルジョアシーによる民主主義革命に発展するのである。

次に、18世紀末から19世紀初めにかけてドイツにおこった、ネオ・ヒューマンイズムの運動がとりあげられておる。ネオ・ヒューマンイズムの字句が出るのは、恐らくこの本のみではなからうか、しかも、それは、次の現代のヒューマンイズムにつながる橋渡しの意味を持つものとして重要な箇所である。要約しよう。

『啓蒙主義のあまりにも知性に偏した合理主義と機械的世界観に対する反動として、近代の自然科学的なもののみかたによってひきおこされた人間性の分裂(たとえば知性と感情、傾向性と義務、社会と個人などの分裂)

を、人間の美しい調和にみちた魂の形成によって統一し、それによって失われた人間の全体的なすがたをもういちどとりもどそうとしたもの、これが、この時代の人間らしい人間の生き方』\*28 と述べている。このヘルダー、ゲーテ、フンボルトなどを代表者とする芸術を重んじ、ギリシアの理想を復興して人間性の調和的な発展をはかろうとしたネオ・ヒューマンイズムについては、ほとんどの教科書は扱っていないし、扱っても19世紀のドイツの哲学・文芸の浪漫主義の動きとふれるのみに対し、これ程扱い、ヒューマンイズムの動きとしてのべているのは、三省堂のみであり、ヒューマンイズム発展史上不可欠の記述である思う。

これで 1. ヒューマンイズムの歴史的展開は終って、次節、 2. 現代のヒューマンイズムにおいて、社会主義的ヒューマンイズム、実存主義的ヒューマンイズム、実用主義的ヒューマンイズム、その他のヒューマンイズム(ロマン・ローラン、シュバイツァー、ガンジー等)について、順次よくまとめて説き、 3. 現代社会とヒューマンイズムにおいて『人間が真に人間らしい人間、よりいっそう人間らしい人間になろうとする努力は、人間に課せられた永遠の課題である。ヒューマンイズムは、その時々歴史的状況に応じて、その具体的なすがたをとるであろうが、人間が人間であるかぎり、この努力はついに完結することはない。……われわれもそういう努力によって、その限りにおいてのみ、祖国や人類の歩みに自ら参加することになるのである』と結び、次の終章V民主主義の確立のはしがきに『日本人としての共通の課題は、われわれが民主主義をよりよく発展させつつ…』と受けとめ、本文の1現代に生きる基本的態度の記述にはいっている。

しかし、ここで、前節のヒューマンイズムの展開が現代の民主主義の根底に、どのように具体的に問題を呼びかけるか、前章のIV現代に生きるために一人生の諸問題一の中で 1.幸福 2.自由と平等 3.愛 4.ヒューマンイズムと三節にわたり民主主義の主要概念である、自由、平等、個性尊重、社会連帯等についてのべており、そして『これらのものは、実際にはそれぞれの個人の思索や実

\*21 P 123

\*22 P 145

\*23 P 102, P 150

\*24 同上 P 212

\*25 角川 P 135

\*26 P 三省堂 159~160

\*27 三省堂 P 160

\*28 三省堂 P 161~2

踐の中で互いに結びついている。そして、それらのものを結びつけ統一する最も基本的なものが「人間の尊さ」の確信と、「人間の有限性」の自覚なのである。自由で平等な社会の実現も、この二つのものが基本にあつてこそ、はじめて正しく目ざされ、そのための努力も有効に果たされうるのである。』とのべ、2. 国家と国際社会に移るのでなく、一寸、ここに立ちどまって、この倫社の教科書のしめくくりの意味あいからも〔前のIVでの現代社会と幸福、自由、平等、愛、ヒューマニズムの各小節で扱ったことを、ヒューマニズムの歴史的発展の流れの中であらわれたものであり、更に、それらは人類永年の苦闘によってかちえたところの民主主義の確立の中に、規定され、制度化され、慣習となつてきて居るのであり、わが国も、その動きの流れに乗って誤りなく進みうるために、民主主義発展の必然性と普遍性として気づかせることが、極めて大切である。そして、結局は「人間の尊さ」と「人間の有限性」についてしみじみと感じさせることが肝要である。〕

「三省堂改訂版・新倫理社会」について以上述べてきたのであるが、構成からみる時斬新、独創的であり、I 人間の生き方 II 現代社会と人間 から III 先哲の思想の歩み において単なる思想史的記述にならぬよう、思考の特色を考へての主題別の扱いを加味しつつ、現代の社会と思想に該当するところを IV 現代に生きるために一人生の諸問題一として（前述の幸福、自由、愛のテーマ、ヒューマニズム） V 民主主義の確立で結んでいる。客観的でしかも倫社の目標に到達するために学習指導要領にもよく準拠し、生徒に民主主義を理解させるに効果的であるといえると思う。（構成上之に最も近いのが「実教」である。）

ただし、欲をいうならば、他の教科書にないただ一つ扱っておる「ヒューマニズム」についても『はっきりした自覚をもつ運動としてあらわれたのはルネサンスである』にしても、それまでに、ヒューマニズム的なものはなかったであろうか、やはり、他の教科書で字句をみたギリシア的ヒューマニズム、基教教的ヒューマニズムをあげて説くべきではなからうか。人間らしい人間になろうとする、人間であろうとする心情は14～5世紀までなかったということはあるまい。

ところが、どの教科書もルネサンスから始めているのである。世界史の教科書でもルネサンスにおいて出てくるのが大多数ではなからうかという点から、なにも間違っているのではない。けれども真実を伝えているといえるであろうか、と案ずるのである。それならば、ここで何を伝ふべきであるか。それはルネサンス以前の、起源についてふれることである。ここに、三木清編、現代哲

学辞典（日本評論社）昭16年版、の「ヒューマニズム」から要約して引用する。補足説明が必要と思うからである。『ヒューマニズムという語は人間主義または人本主義などと訳されている。ヒューマニズムの基礎をなすのは人間性即ちヒューマニテイの概念であり、もとラテン語の Humanitas から出ている。

ヒューマニテイという語は二重の意味に用いられる。それは先ず、あらゆる人間的なもの、人間に自然的に属する一切のものを意味している。このような意味においてテレンチウス（C, 190～159B・C・）の有名な、「私は人間である。人間的なものの何一つとして私に無関係であると思わない。」という句は、ヒューマニスト即ち、人間主義者のモットーであると言われうるであろう。人間主義者はあらゆる人間的なもの、従つて「人間的な、余りに人間的な」もの、人間の弱さや醜さを現わすようなものをも、人間的なものである故をもつて、なおかつ愛することを知れる者でなければならぬ。〔人間味、人情に豊かな、人間は人間である限り、人間として重んじられねばならない、人間性の尊重という時には、この人間の自然的な、弱さ醜さをもつ人間にもかかわらず、それを含めての上での尊重、ここに人間愛、生命畏敬の生感情を無視する訳にはゆかない、無視出来ないのが人間である。むしろかかる人間だから、人間同志互いにいたわり、他人に対し寛容、同情を忘れず、連帯性が必要とされ、また、それにより民主社会の確立となるのである。ここにヒューマニズムの民主主義への流れがあるといえる。〕

しかし、ヒューマニテイという語は、また人間の現実から進んで人間の理想を意味している。人間性とは人間を人間となすもの、即ち人間の本質であると考えられるところから、それは人間が人間として動物から区別される、より高い存在である所以のもの、従つて人間の人間としてあるべき姿、人間の価値と品位とを形作るもの、一言でいえば人間理想を意味することになる。

かようにして人間性という語は、一方、人間の自然、現実を意味すると共に、他方、人間の当為、理想を意味する。これら二重の意味は、一は他へ推移し、互に交錯することができ、そしてそこから人間主義の多彩な像が描き出されるのである。〔混乱・誤解もある。〕

たとえば、キケロ（106～43, B・C）にあつては、彼こそヒューマニテイの理念を哲学論文の中心に扱い、ヒューマニテイの概念の本来の創造者であつたといわれ、それ故、ヒューマニテイの概念は古典的古代の概念と結びつく、ひとつの古代的概念であり、それは何よりもギリシアの生活文化のうちに、その源泉を有している。しかし、このギリシアの生活文化はギリシア人自身

にあっては反省の対象とはならなかった。ギリシア人はギリシア的人間を生きたのである。ギリシア的人間の内的な高さから距っているのを感じたローマ人が初めて、ギリシア的人間を人間理想として感じ、ギリシア人の間で極めて重要な位置を占めたあの Paideia — 教養、しかも人文的教養を重視し、フマニタスという語はこのような教養並びにその結果としての高尚な趣味、品格を意味した。ここに我々はヒューマニズムが既にキケロにおいて特に人文主義というべき意味を存することを見出すであろう。かくキケロのいうヒューマニティは、教養によって浄化された人格の理想である。〔ギリシア的ヒューマニズムといわれるものが、ローマに生まれ、ルネサンスに再生する。そして、そこには、学芸を重んずる、文化を愛する教養人が求められたのである。それは教育による啓蒙、人間教育の普及に邁進する民主主義教育運動につながるものといえよう。〕

かようにしてヒューマニティの概念はギリシアの生活文化に対するローマ人の反省から形成されたものであるが、普遍的人間性の意味におけるヒューマニティの理想はむしろ実にストア哲学によって基礎を与えられたのである。ギリシア人は、アリストテレスによって代表されている如く、自己と野蛮人との間に、また市民と正当視された奴隷との間に、人間的価値の区別を立てたのであるが、ストア哲学者はかような区別を克服されたものとして排除した。当時の社会的政治的事情に相応して、ストア哲学者は世界主義を唱え、世界市民の理念をたて、人間性の共通普遍を主張した。かくしてヒューマニティの概念はあらゆる人間に通ずる人間性を意味し、そこからその語は普遍的な人間愛 Philanthropia、博愛を意味することになったのである。歴史的な概念としてのヒューマニズムに含まれるこの世界主義的傾向、人類的傾向に注意しなければならない。更に、かくの如くストア哲学によって作られた、人類の意味におけるヒューマニティの理念は、キリスト教の影響によって一層深い意味と大きな力を獲得するに至った。そして政治的、現実的にはローマ帝国の発展に伴う万民法の施行、ローマ・カトリックの教化、神聖ローマ帝国の成立につれ、キリスト教的ヒューマニズムの流れとなっているのである。』

これから、ルネサンスのヒューマニズムに移るべきである。ヒューマニズムの名でよばれる最初の歴史的な運動、世界史的な意味を持つに至る運動はもちろん、ルネサンス期の人文主義者のそれで、それも、イタリアの商業都市の繁栄を背景におこった人間解放運動、詳しくは中世の封建的社会における人間性の抑圧歪曲に対する人間性の尊重、人間性の解放の思想・態度の現われであったのであるが、それ以前においても、当時の社会にあっ

て、抑圧に対する反抗、より人間的なるものを求め、人間らしい人間たらんとする人々の心情、態度が認められるのである。そして、かく抑圧や、非人間的なるものに対する鋭い反抗という如く、既成の事実に対する否定、解放という防禦的、受身的な動きが共通してみられ、それが能動的攻撃に転じて民主革命や諸改革がなされて行くといつてよい。

そこで、終りに各社がこれまで「ヒューマニズムの精神」として、そして「民主主義の根底」に通ずるものとしてのべてきたものを整理してあげて比較した上で、まとめることにしよう。

『教育図書』<sup>＊</sup>生命に対する畏敬の念に基く、ひとりひとりの人格を、かけがえのない尊厳なものとして感じることこそ、ヒューマニズムの精神であり、それが民主主義となる、と生命、人間性、人格、個性の尊重、自我の自覚がヒューマニズムに含まれるとする。

『講談社』<sup>＊</sup>ヒューマニズムの三つの特色として、人間尊重、現実生活の肯定、教養・文化尊重をあげ、それらがデモクラシーの根底にある、と述べているにとどまるが、前書とやや異なり、現代的にギリシア・ルネサンス型を強く出しておる。

『日本書院』<sup>＊</sup>よき市民、職業人としての社会人、教養人、平凡人（協力的、謙讓的）、は上書とほぼイメージはマッチする。しかも常識的でより現代的といえる。

『大教』<sup>＊</sup>人間愛、ヒューマニズムの精神を基礎にするのが、われわれの倫理である。

『自由書房』<sup>＊</sup>人類愛はヒューマニズム、「大教」と「自由」は、言わんとするところはほぼ同じであるが、ただそれだけをヒューマニズムとして、民主主義の根底におくのは不充分であると思われる。

『中教』<sup>＊</sup>正義と愛とを基調とする人間性の尊厳に対する畏敬こそ、ヒューマニズムの精神であり、民主主義の根底である。

『三省堂改訂版』<sup>＊</sup>人間に最高の価値をおき、いっさいを人間中心に考える立場に立って、真に人間らしい人間を求める努力や運動や思想を広くヒューマニズムという。

上記二書の記述は「ヒューマニズムと民主主義」とを関連づけている点で『中教』のが最もすぐれていると思われるが、内容的の説明では『三省堂』のがもっともすぐれているといえよう。ただ既述の如く、ヒューマニズムの補充とデモクラシーとの関連づけを前章での記述の復習的整理によって、まとめるとしたら、三省堂改訂版の修正版こそは、倫社の教科書の構成として、学習指導要領に準拠する最もよい教科書となるであろうと察するのである。